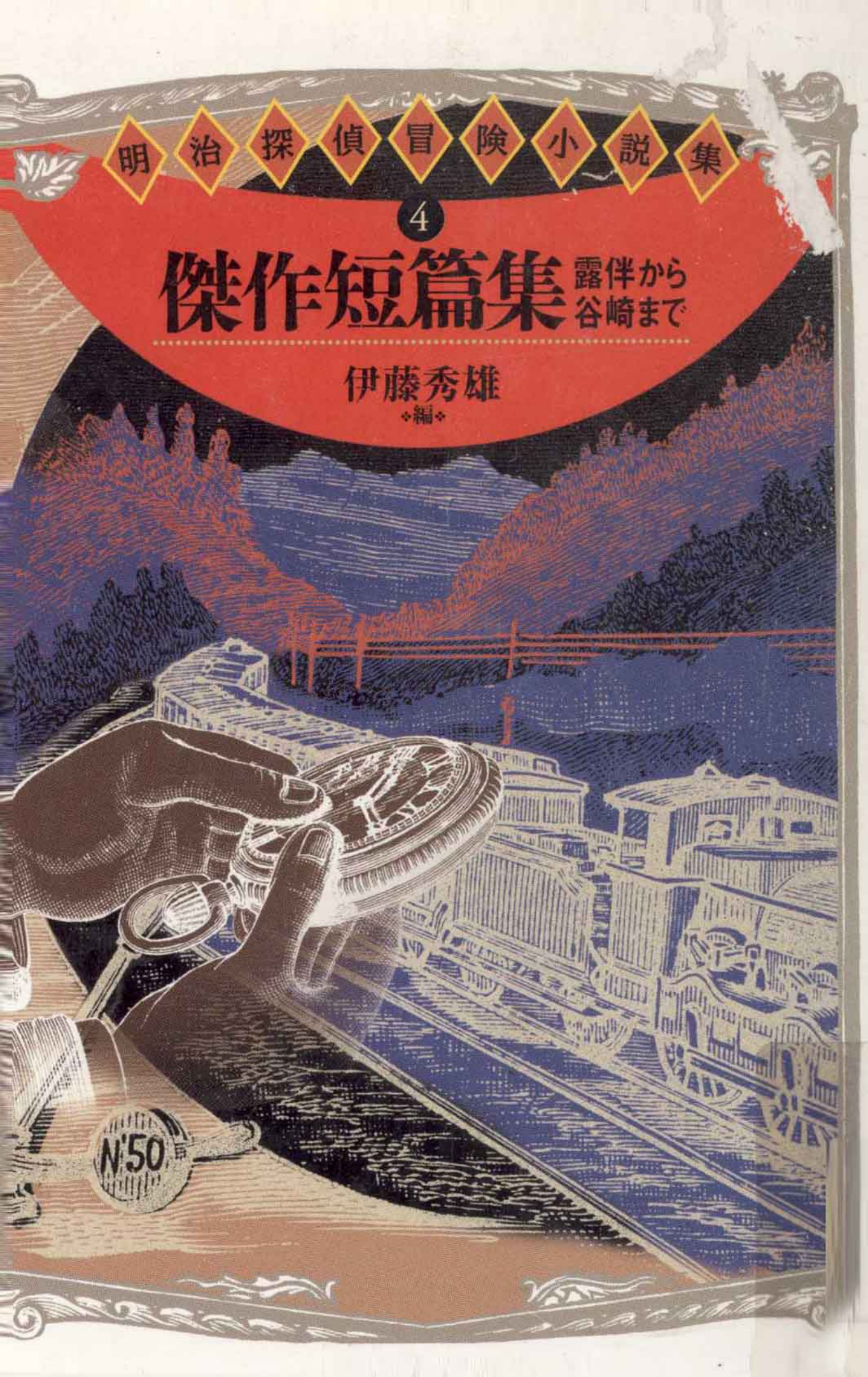
明治探偵冒険小説集

4

傑作短篇集 露伴から谷崎まで

伊藤秀雄 編



傑作短篇集
露伴から谷崎まで
明治探偵冒険小説集

二〇〇五年七月十日　第一刷発行

著　者　幸田露伴（こうだ・ろはん）ほか
編　者　伊藤秀雄（いとう・ひでお）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一一三
装幀者　安野光雅
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社鈴木製本

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。
送料小社負担でお取り替えいたします。
ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市北区櫛引町二―六〇四　〒三三二―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三
© HIDEO ITO & EMIKO KANZE 2005 Printed in Japan
ISBN4-480-42084-3 C0193

ちくま文庫

傑作短篇集

露伴から谷崎まで

探偵冒険小説集

伊藤秀雄 編

江苏工业学院图书馆
藏书章

目次

あやしやな　幸田露伴　7
弁護美人　梅の家かほる　39
化物屋敷　丸亭素人　117
名人藤九郎　（作者不詳）　143
少年の悲哀　国木田独歩　245
難船崎の怪　滝沢素水　259

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

汽車中の殺人　三津木春影　345
秘密　谷崎潤一郎　385
指の秘密　姫山　415
解説　伊藤秀雄　447

傑作短篇集——露伴から谷崎まで

明治探偵冒険小説集4

あやしやな

幸田露伴

幸田露伴（こうだ・ろはん）

慶応三（一八六七）年江戸生まれ。電信修技学校卒業後、北海道に赴任するが二年で辞職して帰京。明治二十二年処女作『露団々』を発表、続く『風流仏』で作家の地位を確立する。以後、『五重塔』（明二四―二五）など理想主義的作物で尾崎紅葉と並ぶ人気作家となる。他に長編小説『風流微塵蔵』（明二四―二五、未完）、史伝『運命』（大八）など。『露団々』には秘密インクを用いた密書が登場、『是は是は』（明二二）では詐欺が扱われ、『あやしやな』とともに、最初期の探偵小説として貴重な作品も多い。昭和二十二（一九四七）年没。

一

死にました死にました、あの朴訥爺(ぼくとつおやじ)のばあどるふは死にました、あの美しい若い妻を持っていたばあどるふは死にました、その死に方が少し怪いという噂、一昨日の晩から熱病をやんで早くも今日の往生、めでたくもない苦しみよう、医者もかくまでとは思わなかった人の命のもろさ、露ちりかかるろざりんの花の顔も萎(しお)れて、泣く泣く野辺の送りという段取りになって、医者のぐれんどわあが病死の証明状を作らぬという騒ぎ、どうやら訳のありそうなこと、と探偵だんきゃんの告ぐるを聞いて、油断のならぬ恐ろしの世の中、そなたはなおも気を付けろ、うぃるりやむも出てゆけ、ちゃあれすも聞糺(ききただ)して来いと、署長のへんりい・ぶらいとの差図に、心得たりと走り去りしが、やがてうぃるりやむは帰り来て、医者は三里程隔たりし近在に住み、夫婦暮しの信実者(しんじつもの)、村中にて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

善い人との評判高き男なれば疑うべき方もなし、若き妻こそ心得難し、とささやく横合より、いやいやあの美しい女、面計りにてはあらぬぞかし、亡き夫の傍に坐りて、一心に祈禱する声も枯るるまで惜まぬ涙、立ち聞きする身さえ悲しさにつれられて、不信神の我ながら口の中で「ああめん」と唱たる程なるに、呑み込めぬは医者のそぶり、とちやあれすの云い状。

いずれをいずれとも別ち難きところへ、思案に首をかしげてもどりしだんきゃんが、さてもふしぎやばあどるふと云う男、生れてから今日の先程までも遂に一度口論したことなく、兀頭たたかれても御手はお痛みなさらぬかというような結構な性質、賭博もせず酒も飲まず、恨みを受くる筈もなきたしかな品行、殊更身体も丈夫にて、かねて行く道も昨日今日とは思わざりし、と話すを聞いて署長はしばらく考えしが、ろざりんは何歳ぞ、何今を盛りの二十三歳、ばあどるふは、はて僅かに残る山の端の月影は五十八歳とや、二人の婚礼は去年の春、女の身元は伯爵しゃいろッく、平生交際するものは、なにばあどるふは交際ぎらいにて、日曜毎に会堂へ行く計りか、伯爵がただ月に一二度往復するか、年齢は三十七歳か、容貌は荘厳、弁舌はさわやかに、むむそうか頃日来たか、なに熱病になった日はからず来たというか、して使も来たか、何の用だ、むむその使は直接にろざりんに逢って帰ったのか、よしよしそれでよし、ばあどるふの家に下婢

は居ないか、りうしといふのが居るとか、よしよしそれをろざりんに知れぬように拘引して来い、という命令。探索の為とは云いながら警察署の下婢とはならぬものを迷惑なことなり。

二

ああこれおゆるしなされて下さりませ、悪いことはたった一度、買物に出た戻り道の夕暮がた、灯台下暗く瓦斯の光りも届かぬところに落ちていた、奇麗な「ないふ」を拾って届けなかった計でござります、それもただ今さしあげまする、と泣顔してのりうしが申し訳は、署長よりも尊き良心に責められての白状、誠に可愛きものなり。いやいや、そちが心の正直なはその言葉でも分っている程に、も一つ正直に御上のご用を勤めたらご褒美の出ることであろう、とぶらいとのすかすを聞いてのこのこと頭をあげ、ご用とは何でござりますか、お買物なら棒先は切りませぬ、お台所の煮焼なら摘み喰いも致しませぬ、とまじめに云いたるは慾にひかるる習いとておかしきを忍び、そんな事ではないが、ばあどるふが病気になった時からのありさまを正直に話しさえすればよいのだ、といえば、そんな事でご褒美が出ますか、と問うけげん顔。ああ私が悪るかった、お前は正直に話してくれるに相違ないものをご褒美を後にすることもなかった、と光るもの

をちゃらちゃらと鼻の先につきつければ、もじもじしながら、一昨日の晩。これりうし、二月七日だな。はいその二月七日の夜、ばあどるふ様は聖書をお読みなすったり、涙を流して祈禱なすったりして夜のふけるまでもお休なさらぬを奥様が、寒いに夜ふかしはお年寄の御身に毒、お休みあそばせとお止めなさるをも構わず、貴様もりうしも寝るがよい、おれは今夜はまだ寝られぬからとのことで、仕方なく奥様も私も臥りました、そのあと石炭もつき暖炉の火も絶え石造の家のうら寒きに、夜の明くる時分とろとろとなすったやら、お眼がさむるや否や御顔の色も大分わるく、一昨日の昼頃はたいそう熱が出まして。と饒舌り立てるうち、何故ばあどるふはその夜に限り寝なかったのだ、と問われて、何ゆえかは存じませねど、私は三年計り以前からこの家に使われておりますが、たしか去年もおととしも二月七日の夜は、ばあどるふ様のよく御寝なったことはなかったようです、それからだんだんと熱は強くなりますし、お医者様と伯爵様のお出でになった頃はいろいろの譫語をおっしゃりますし、夜へかけてもいっそうはげしくなりましたが、今朝になってお薬をあがるとすぐにたっての苦しみ、とうとう情深い旦那様にお別れ申すこととなり、奥様も狂乱なさる程のおなげきのあまり、あの医者の薬を飲まれずばこうはなられまいと独り言なすったが、運わるくぐれんどわあの耳に入って、病死の証明状作ることはいやでござるとの言い草、ぐれんどわあの薬飲んで亡くなられたと

云われては名誉にも拘わるなれば、薬の盛りようの善かったか悪かったかは外の医者どもに問い糺してご覧なすって、得と御合点の行った上でならでは証明状は作りませぬとの言葉ももっともにはあれど、奥様とてわる気で云うたではなしと云い訳しても首振って頑固な同じ挨拶、世智賢き女でさえ連添う夫の死に別れには顚倒するならい、まして御年も若いに医者の片意地、かなしみのうちに苦労の調合、あんまりなお医者さまと私らまで憎うてなりませぬ、と涙ぐんでの少女の返答、嘘らしくはなけれどぶらいとはぬけ目なく、その憎い医者は誰が頼んで来た、と問えばりうしは真青になりがたがた慄て言葉なき様子をじっと見ながら、少しも怖いことはない、正直の少女は神も護れば人も憐れむ、なんでも正直に限るぞや、其方が頼んで来たのか、といえば詮方なく、はい私が頼んで、とおろおろ泣き。よしよし、そなたに罪はない、そして伯爵もそなたが喚んで来たのか、その時の模様を委しく正直に話しさえすれば、それで其方は用済みなのだ、とやさしきに勢い付いて、いいえ伯爵様は私の呼んだのではありませんが、はからずお出でになり、ばあどるふ様の熱病となられたを見てびっくりなすった御様子、しきりに奥様とお医者様に御容体をお聞きなすっていらしったが、お医者様のお帰りになったあとで、熱病の譫言は人に聞こえて外聞のよくないこともあるものなれば、よく注意なすって外へ漏れぬようになさいと云ってお帰りになりましたが、日暮れ方にお使にてまた

わざわざお見舞を下されました、誠に御慈悲深いよいお方です、といえば、小首かたぶけしばらく思案せしが、はたと手を拍ちて、どんな譫語を云ったか、と問えばりうしは笑いながら、譫語ですから分りませんが、「くいッくりい」というだけは聞きとれました。

三

さあ拘引状は出来た、医師ぐれんどわあ、後家ろざりん、伯爵しゃいろッくを呼んで来い、容易ならぬ謀殺の嫌疑、されど伯爵は貴族院の議員にもならんとする人、鄭重に扱うべし、疑わしき品物はみな持ち来たれ、と署長の下知に、しばらくして三人共巡査に引出されたるを見るに、ろざりんは美しくはあれどあだめいて猥らなるにはあらず、泣き腫らしたる瞼の重げなるにもその行いのかるがるしからぬは見えたり。ぐれんどわあは容貌端正にて人をも恐れず天をも恐れず、吾は自ら信ずる所を恃むという風情。伯爵は貴族育ちの鷹揚なるうちに深き思慮分別を養い得たるというべき所の見ゆる人品なり。

ぶらいとはまず医師に向い、何とてそなたは、そなたの預りし病人の病死に証明状を作るを拒みしや、必ずその仔細あるべしとは存ずれども、ばあどるふ一家の者の言葉に

よれば、そなたの薬を飲むと等しくばあどるふは苦しみ出して遂にはかなくなりたりといえば、まずこれを云いわけすべし、と問うに、ぐれんどわあは、拙者の用いたる薬は決してばあどるふの死を致すべきものにてもなく、またばあどるふの病も左程急に死すべきものにもあらざるに、心得難き頓死ゆえ証明状を作らざりしが、拙者の与えたる薬をお疑いあらばろざりん殿の家にはなお余りのあるべければ、それを化学師になり医師になり試験致させてみらるべし。さあそれにて御身は明白なれど、ただ今心得難き頓死と云われしは何の意味。されば万一中毒なりやと疑えども。疑われじな。如何にも。さてはそなたの与えし薬の中毒。いや怪しからぬこと、恐らくは他人の与えし物の中毒ならんと疑うまでなり。むむ毒殺したるものあらんかと疑われしな。誠に仰せの通りなれども、疑うまでにて必ずと申すにはあらず、心得難き頓死とはすなわちこれゆえ申せしなり。と、この問答の間伯爵は彫刻像の如く身動きもせず、ろざりんは赤くなり青くなり遂に柳眉をさかだて星眼を睜きて、吾が夫を毒殺と聞いてはゆるがせならず、吾が夫はぐれんどわあの与えたる薬の外には誰の薬も飲まざれば。さては拙者を疑いたまうか。如何にも仰せの通りなれど疑うまでなり、必ずと申すにはあらず、元より女のことなれば医薬の道は知らざれど、もしやそなたの誤りかと。それ程までに疑われては医者の一分立ち申さず、拙者の疑いはさて置きて、いざまず拙者の薬をば試験あるよう署長にお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com